109

山ノ中遺跡（やまのなか）

（鹿児島市西別府町字山ノ中）

位置と環境

錦江湾に注ぐ新川の２つの支流に抉られて残ったシラス崖上にあり，急峻な地形のわずかな平坦地に山ノ中遺跡は位置する。標高は110mほどである。

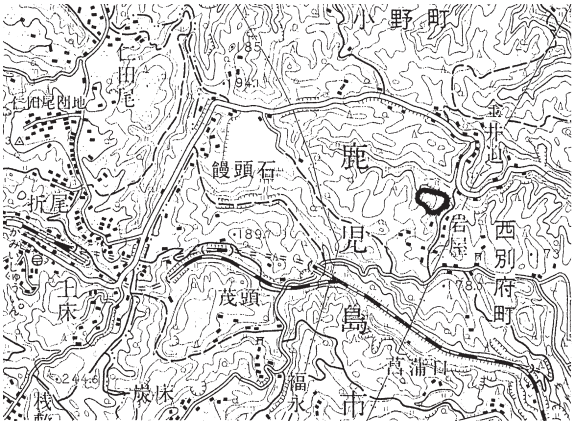
調査の経緯

南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴って，県教育委員会が調査主体となり平成６年（1994年）４月～６月に一部を調査し，平成７年（1995年）６月～平成８年（1996年）３月にかけて本調査を実施した。

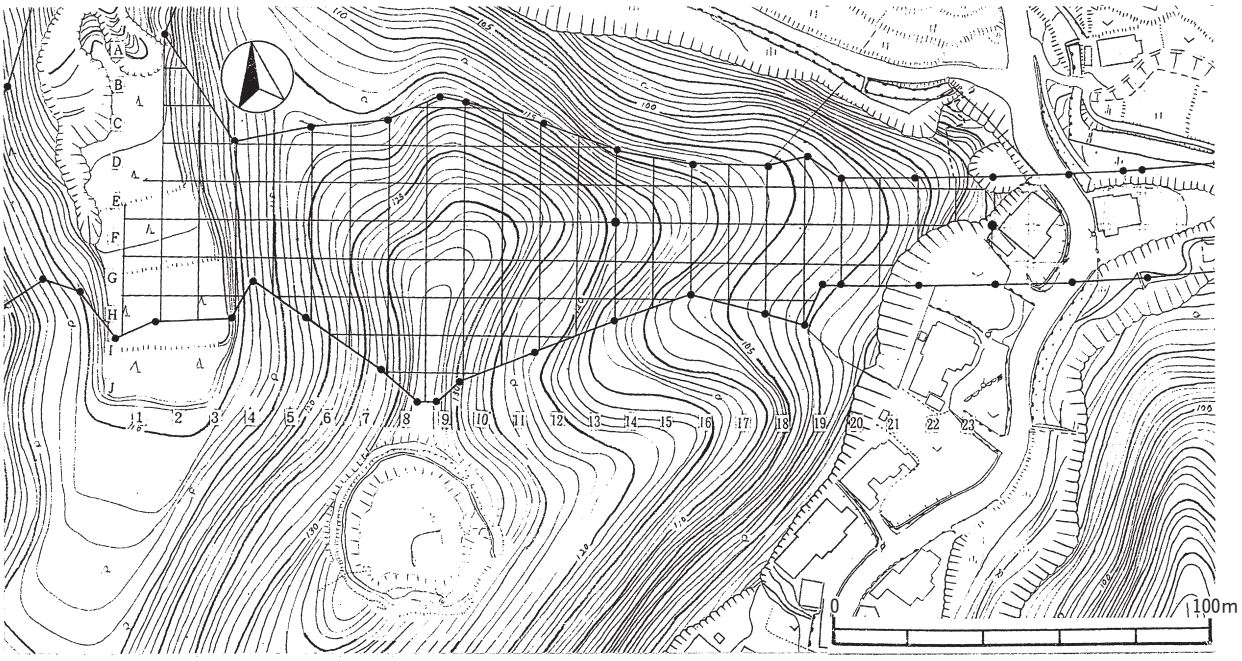
遺構と遺物

縄文時代後期前半の遺物がパンケース約300箱分と多量に出土した。土器は縄文時代後期前半の時期に限定され，大きく４タイプに分けられる。薩摩半島南部でつくられた指宿式土器，志布志湾岸に主体のある中原タイプの土器，西海岸に分布する滑石を含む南福寺式土器，それに九州北東部系統の磨消縄文土器である。さらに，高知県に標識遺跡のある松ノ木式土器が出土していることも判明し，広範囲の交流が行われていたことを窺わせる。木ノ実を用いた放射性炭素年代測定（^{14}C 年代測定）の結果，3,970年前という値が得られている。遺物は土器のほかに磨製石斧・ノミ状石斧・石皿・磨石・木ノ実が多量に出土した。一方，石鏃や石匙はわずかであり，狩猟よりも森と係わる縄文人の生活を窺わせる。このほか，石製垂飾品・円盤形土製品・軽石製品などの遺物もある。

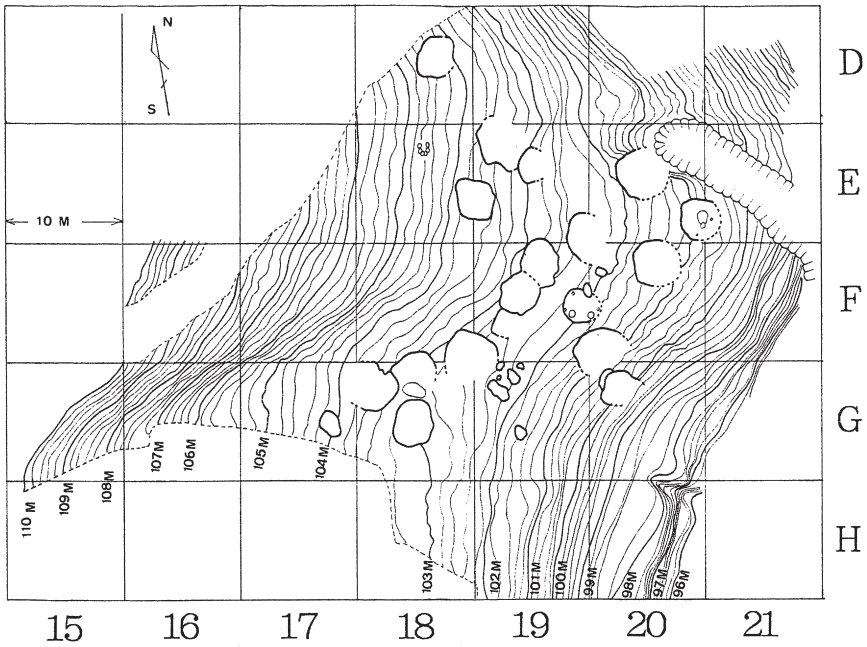
検出遺構は，竪穴住居跡が17軒検出された。円形の住居で，中央に窪みがある。柱穴は検出できず，どのような構造であったのかは明らかに出来なかった。住居内の遺物は床面に密着したものは少なく，ほとんどは埋土中の出土である。二つに割れた大型の石皿が床面近くと上部から出土したことから，住居跡が廃棄された後，不要となった土器類が投げ込まれたのではないかと考えられる。住居外に石組み炉も１基検出された。



第１図　山ノ中遺跡の位置



第２図　山ノ中遺跡周辺地形



第３図　縄文時代遺構配置図

土しており，このような不便そうな場所でどのような生活が営まれていたのかが興味深い。また，平安時代前半の生活が途切れた後に掘られたと考えられる掘り込みが15基検出された。標高の高い方にもう一段深い穴が掘られていることから，山芋や葛の根を掘りだした痕跡ではないかと考えられる。

山ノ中遺跡の山頂部分は中世山城の小田城である。円形に堀を巡らす単郭の山城であり，保存状況が非常に良好である。調査区内では，当時の遺構や遺物は確認できなかった。

遺物は平坦な面よりも傾斜面から多く出土しており，傾斜面側に捨てられた様子が窺える。この点は同時期の遺跡のあり方と同様であり，貝塚のあり方とも類似している。

次にこの地点で人の生活が営まれたのは，古墳時代である。土器が数個体分出土しただけであるので，短期間の生活だったと考えられる。磨製石鏃も１点出土しており，この時期のものである。

平安時代前半にはある程度の期間生活した痕跡が認められ，須恵器や土師器がパンケースに15箱分出土した。「在」という文字が書かれた墨書土器も出

特徴

縄文時代後期前半の竪穴住居跡17軒を伴う集落跡が検出されたのは鹿児島県では初めてである。同じ時期に４つの地域の特徴をもった土器があるのに加え，四国地方に分布の中心がある松ノ木式土器が出土したことにより，幅広い交流があったことが明らかとなった。

資料の所在

出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。　（東　和幸）

写真１　縄文時代後期前半の土器及び松ノ木式土器（右側）